

平成16年10月29日
水産庁
独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所

平成16年度第1回東シナ海漁況海況予報

- 2005年3月までの期間の東シナ海から日本海西部の海域における海況と漁況について、別表の水産関係機関が検討し、独立行政法人水産総合研究センター西海区水産研究所がとりまとめた結果 -

今後の見通し(2005年3月までの期間)

海況

- (1)九州南方海域の黒潮は、「屋久島南付近での変動」で経過する。
- (2)九州西方の対馬暖流水は、前半は「西寄り」、後半は「東寄り」で経過する。
- (3)東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

漁況(来遊量予測)

- (1)マアジ:前年並み。
- (2)マサバ:前年並み。
- (3)ゴマサバ:前年並み。
- (4)マイワシ:極めて少ない。
- (5)ウルメイワシ:前年並み。
- (6)カタクチイワシ:前年並み。

1. 本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>), 水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進対策委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/gk15/15gkindex.htm>)に掲載されません。
2. 本予報の内容等に関する問い合わせ先は、以下のとおりです。
水産庁増殖推進部漁場資源課沿岸資源班 担当:青木・宮崎(潤)
住所:〒100-8907 東京都千代田区霞が関1-2-1
電話:03-3502-8111(内線7376)03-3501-5098(直通)
ファックス:03-3592-0759
電子メール: jyunta_miyazaki@nm.maff.go.jp
水産総合研究センター西海区水産研究所企画連絡室
住所:〒851-2213 長崎市多以良町1551-8
電話:095-860-1662 ファックス:095-850-7767
電子メール: kiren@snf.affrc.go.jp
(海況担当:中川倫寿 095-860-1623; 漁況担当:檜山義明 095-860-1634)

参加機関

山口県水産研究センター

福岡県水産海洋技術センター

佐賀県玄海水産振興センター

長崎県総合水産試験場

熊本県水産研究センター

鹿児島県水産試験場

沖縄県水産試験場

(社)漁業情報サービスセンター

独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所

平成16年度第1回東シナ海海況予報

1. 今後の見通し(2004年10月～2005年3月)

(1)海流および水系分布

・薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月頃には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近での変動」で経過する。

・九州西方における対馬暖流水の分布は、前半は「西偏」、後半は「東偏」で経過する。

(2)表層水温

・前半、後半ともに、山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甌沖、薩南沿岸、黒潮域、大陸棚上は「平年並み～やや高め」、沖縄島周辺海域では「平年並み」で経過する。

2. 経過(2004年4月～2004年9月)

1. 大陸棚上

(1)水系

中国大陸沿岸水は4～7月と9月は「東偏」で経過。

(2)海面水温

北部:4～6月「平年並み」、7月「やや高め」、8月「はなはだ高め」、9月「平年並み」。

南部:4月「かなり高め」、5～8月「やや高め」、9月「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1)海流・水系

沖縄北西方の黒潮の流路は、春季、夏季ともに「平年並み」。流量は、春季は「平年並み」、夏季は「かなり少なめ」で経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、4・6・8月は「離岸」、5・7月は「接岸」、9月は「屋久島南付近での変動」で経過。

(2)海面水温

4月「やや高め」、5月「かなり高め」、6～9月「平年並み」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1)海流・水系

対馬暖流水の分布位置は、4～7月は「西偏」、9月は「東偏」で経過。

(2)表層水温

山口県沖合:4月「かなり高め」、5・6月「平年並み」、7月「かなり高め」、8月「やや高め」、9月「平年並み」。

山口県沿岸:4・5月「やや高め」、6月「平年並み」、7月「かなり高め」、8・9月「平年並み」。

対馬東水道:4月「やや高め」、5月「平年並み」、6月「やや高め」、7月「かなり高め」、8月「やや高め」、9月「平年並み」。

壱岐水道：4・6月「かなり高め」、8月「平年並み」。
五島西沖：4月「平年並み」、6月「かなり高め」、8月「やや高め」。
五島灘：4月「平年並み」、6月「かなり高め」、8月「平年並み」。
天草西沖、西薩・甌沖：4月「やや高め」、5月「平年並み」、8月「やや高め」。
薩南沿岸：4・5月「平年並み」、8月「やや高め」。
薩南沖合：4月「やや低め」、5・8月「平年並み」。
沖縄島南東：4・6・8月「平年並み」。

(3) 表層塩分

山口県沿岸・沖合：4月「やや高め」、5月「平年並み」、6月「やや低め」、7月「やや高め」、8月「平年並み」、9月は沖合では「平年並み」、沿岸では「やや高め」。
対馬東水道：4・5月「平年並み」、6月「やや低め」、7月「やや高め」、8月「平年並み」、9月「やや高め」。
壱岐水道：4・6・8月「平年並み」。
五島西沖：4・6・8月「やや高め」。
五島灘：4・6月「平年並み」、8月「やや高め」。
天草西沖、西薩・甌沖、薩南沿岸：4・5月「平年並み」、8月「やや高め」。
薩南沖合：4・5・8月「平年並み」。
沖縄島南東：4・6月「平年並み」、8月「やや高め」。

3. 現況(2004年10月上旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部・南部とも「平年並み」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「離岸」。海面水温は「平年並み」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「平年並み～やや高め」。

(註) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」： 約22年に1回程度の出現確率
「かなり」： 約7年に1回程度の出現確率
「やや」： 約3年に1回程度の出現確率
「平年並み」： 約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域あじ・さば・いわし長期漁況予報

今後の見通し(2004年11月～2005年3月)

対象海域: 東シナ海～日本海西南海域

対象漁業: まき網、定置網、その他

対象魚群: 0歳魚(2004年級群(2004年生まれ))、1歳魚(2003年級群)、2歳魚(2002年級群)。魚の大きさは、あじ・さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量: 前年並み。

(2) 漁期・漁場: 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3) 魚体: 10～19cmの0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)及び19～24cmの1歳魚(小銘柄)が主に、24cm以上の2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量: 前年並み。

(2) 漁期・漁場: 沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年を上回り平年を下回る。

(3) 魚体: 25～28cmの0歳魚(豆銘柄)及び29～32cmの1歳魚(小銘柄)が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量: 前年並み。

(2) 漁期・漁場: 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年を下回り平年並み。

(3) 魚体: 25～30cmの0歳魚(豆銘柄)及び31～35cmの1歳魚(小銘柄)が主に漁獲される。沿岸域では、1月以降には、35～40cmの2歳魚以上(中・大銘柄)が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量: 極めて少ない。

(2) 漁期・漁場: まとまった漁場は形成されず、散発的に沿岸域で漁獲される。

(3) 魚体: 15～20cmの0～2歳魚(中羽・大羽銘柄)が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量: 前年並みで平年を下回る。

(2) 漁期・漁場: 漁期前半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体: 15～25cmの0～1歳魚(中羽・大羽銘柄)が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量: 前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場: 漁期は前半が主体で、漁場は沿岸域が中心となる。

(3) 魚体: 10cm程度の0歳魚(大羽銘柄)が主に、5cm程度の0歳魚(小羽銘柄)も漁獲される。

注: 「前年」は2003年11月～2004年3月。「平年」は過去5年の平均値。「沖合域」は大中小型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過(2004年4月～8月)および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代前半に増加し、1993～1998年には高水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため資源は減少傾向を示したが、2001～2003年の加入量は1994～1997年の水準に回復し、2003年の資源量も増加した。東シナ海・日本海(青森県～鹿児島県)での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年に9～14万トンであったがその後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13～15万トンに減少し、2003年は15万トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代には比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年以降減少し、1999～2003年は低い水準にある。東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバ漁獲量は、1970年代後半には27～30万トンであったがその後減少し、1990～1992年には13～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降漁獲量は増加傾向を示し、1996年には40万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少し、2002年は89千トン、2003年は90千トン、と低い水準にある。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、1992～2003年に比較的安定して同程度の水準を保っている。東シナ海・日本海における我が国のゴマサバ漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の88千トンが漁獲された後、やや低い45～63千トンの漁獲が続いており、2003年は47千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海においてマイワシは、1980年代後半から1990年代前半にかけて多く漁獲されたが、その後急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移している。1999年には、0歳魚がやや多く漁獲され、資源状態は低位ながらも一時上向いたが、その後は減少し近年は極めて低位にある。海域によっては水揚げ量が前年を上回ることもあるが、全体として資源は低水準である。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

1990年代以降では、2000年まで資源は漸減傾向にあったが、2001～2002年の加入量が以前よりも多かったため、一時的に資源は上向いた。2003～2004年の加入量は2001～2002年の加入量よりも少ないとみられる。

(6)カタクチイワシ対馬暖流系群

1990年代以降では、1995～1996年および1998～2000年にかけて資源は高水準で推移した。2001年の夏季までは沿岸域を中心に好漁が続いていたものの、2001年秋季から2003年春季までは加入量が少ない状態が続いていた。2003年秋季以降はやや好漁となっている海域が増えている。

2. 漁況の経過

2004年4～8月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖、五島西沖および東シナ海中部が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計3万8千トンで前年(2003年4～8月)の5万1千トンを下回った。マアジは2万4千トンと前年(2万4千トン)並み、さば類は7千トンで前年(1万9千トン)を下回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、海域により差があるが、全体的には前年を上回り平年並みであった。漁獲の主体は、15～20cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。マサバは、海域によって差があるが、概ね前年を上回った。漁獲の主体は30cm以下の0～1歳魚であった。ゴマサバは前年・平年を下回った。体長35cm以上の2歳魚以上と30cm以下の0歳魚が主に漁獲された。マイワシは、福岡県と長崎県沿岸で低調だった前年を大きく上回ったが、その他では前年と同様に極めて低調に推移した。全体としては前年を上回ったものの、平年を大きく下回った。漁獲の主体は15～21cmの1～2歳魚であった。ウルメイワシは、福岡県・長崎県・熊本県で前年を上回ったが、その他では前年並みであった。全体として、前年を上回った。4～5月は体長16～24cmの1～2歳魚主体で、6月以降に6～17cmの0歳魚が主体となった。カタクチイワシは熊本県と鹿児島県で前年を下回ったが、その他では前年を上回ったか前年並みであり、全体としては前年並みであった。4～5月は10～14cmの0～1歳魚が主体で、6月以降は4～10cmの0歳魚が主体となった。

3. 今後の見通しの説明

(1)マアジ

例年、11～3月期には0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)が漁獲の主体で、1歳魚(小銘柄)、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2002年級群の豊度は2001年級群よりやや低いが、2003年級群は2002年級群より豊度が高いと考えられる。2004年級群について、2004年2～4月に東シナ海～九州沿岸域で行った仔稚魚分布調査及び6月、8月に東シナ海～山陰沿岸域で行った幼稚魚分布調査の結果から、2002年級群と同程度の豊度と推定される。これらから、0歳魚(2004年級群)は前年(の0歳魚)より少なく、1歳魚(2003年級群)は前年より多く、2歳魚(2002年級群)は前年より少なく、全体の来遊量は前年並みと見積もられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE(1日1隻当り漁獲量)は、最近2年間高い値を示しており、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量(参考図参照)は、近年比較的高い値で推移している。沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並みになると考えられる。

(2)マサバ

例年、11～3月期には0歳魚(豆銘柄)と1歳(小銘柄)が漁獲の主体となる。2003年級群の豊度は低い。2004年級の評価は難しいが、漁況の経過から、2003年級群より高いとみられる。これらから、0歳魚(2004年級群)は前年を上回り、1歳魚(2003年級群)は前年を下回り、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

近年、沖合域・沿岸域ともに、漁況の指標は低い値で推移している。来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域では不漁だった前年を上回るものの平年は下回ると考えられる。

(3)ゴマサバ

例年、11～3月期には0歳魚(豆銘柄)が漁獲の主体となる。前年には、鹿児島県で1歳魚と2歳魚以上も多獲された。2002～2003年級群の豊度は低い。2004年級群の評価は難しいが、沿岸域に比較的多く分布しているようであり、2004年級群の豊度は2003年級群より高いとみられる。これらから、0歳魚(2004年級群)は前年を上回り、1歳魚以上(2003年とそれ以前の年級群)は前年を下回り、全体の来遊量は前年並みと見積もられる。

前年は、沖合域の指標は低い値で、沿岸域(鹿児島県)では比較的高い値となった。沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は、前年比率の高かった1歳魚以上が前年を下回ることから、前年を下回ると判断される。

(4)マイワシ

2001年に東シナ海、日本海における産卵調査の結果が過去最低となって以降、沿岸域でのマイワシの漁獲量は極端に少なくなった。2002年に沿岸域での漁獲量は底打ちとなり、2003～2004年は前年を上回る漁獲量で推移しているものの、2000年以前に比べて漁獲量は少ない。したがって、マイワシの来遊量は前年を上回る海域もあると考えられるが、全体として依然として低位のまま推移すると判断される。

(5)ウルメイワシ

2001～2002年には当歳魚の加入がやや良く、来遊水準は一時上向いたものの、その後はやや漸減傾向にある。2004年の夏季に行った計量魚群探知機調査でも前年を下回った。ただし、沿岸域の4～8月の漁況は前年を上回っているため、前年並みの来遊資源量はあると判断される。前年並みの来遊資源量であれば平年を下回る。

(6)カタクチイワシ

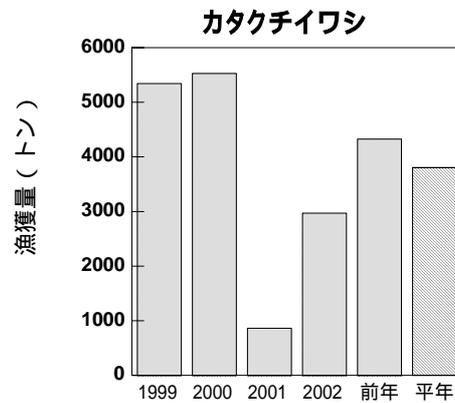
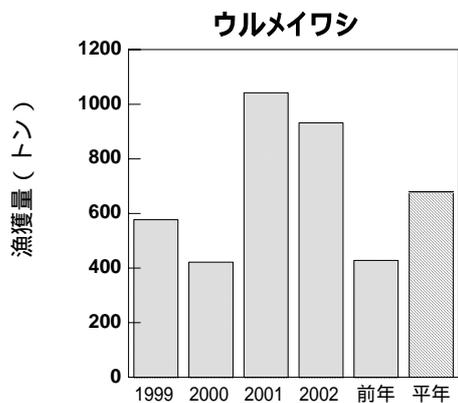
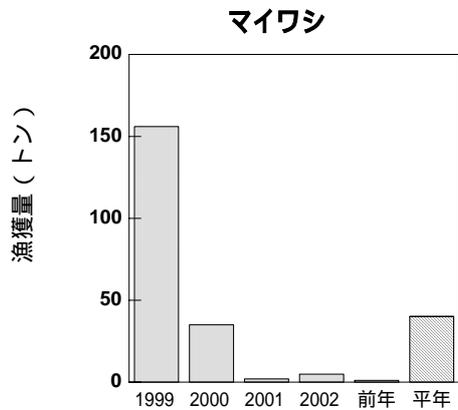
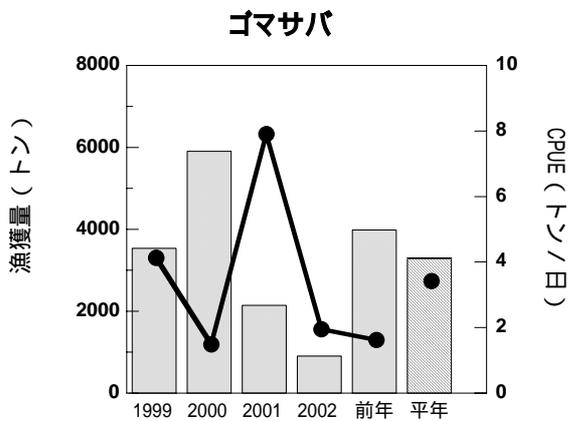
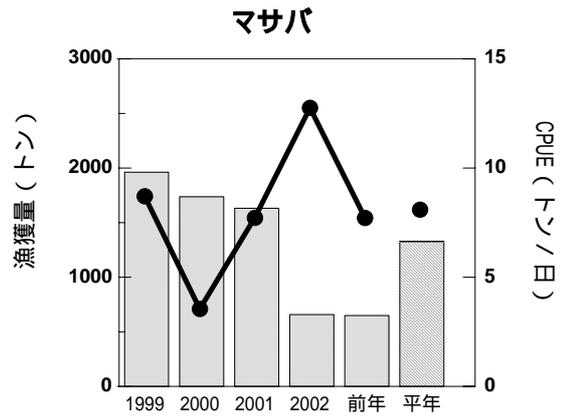
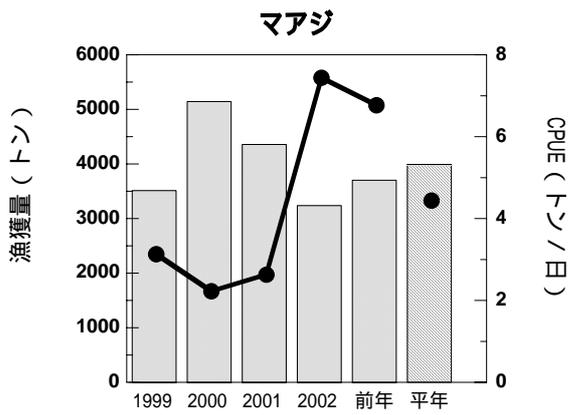
2003年秋季以降には、来遊資源量がやや上向いていると判断される。2004年初夏季に行われた新規加入量調査、および2004年夏季に行われた計量魚群探知機調査でも前年を上回ったが、直近の沿岸での水揚げ量はさほど増えてない。ただし、長崎県以南では、秋季発生群が良好な加入となって、来遊量が前年・平年を上回る可能性がある。

表1. 沿岸域の漁況経過(2004年4~8月、一部9月を含む)

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	<p>中型まき網(6ヵ統分、残り2ヵ統分未集計)で1,424トン水揚げがあった。これは前年比(8ヵ統)94%、平年比(8ヵ統)80%で前年・平年並みであった。江崎地区の小型まき網で8月、マアジ当歳魚(ゼンゴ)を中心とした水揚げがあり、22トン漁獲され前年比329%、平年比122%となった。一方、湊地区の棒受・すくい網では、ゼンゴが5~9月にかけて毎月1.8~4トン水揚げされたが、こちらは前年比32%、平年比15%と低調に終わった。</p>	<p>中型まき網(6ヵ統分)で132トンの水揚げがあった。これは前年比(8ヵ統)135%、平年比(8ヵ統)57%で前年を上回り、平年を下回った。一方江崎地区の小型まき網・すくい網では今期水揚げが全くなく、湊地区の棒受・すくい網でも、わずか0.04トン(双方とも前年比・平年比は0.04%)と、ほとんど水揚げされなかった。</p>	
福岡	<p>前年・平年に比べ好漁。代表港まき網漁獲量は1,702トンで平年比255%。銘柄は小、ゼンゴ、マメが主体。同じく棒受網は77トンで平年比50%であった。銘柄は小・マメが主体であった。</p>	<p>代表港まき網の漁獲量は274トン。平年比213%、前年比228%であった。棒受網は1.01トン、前年比532%、平年比139%。まき網、棒受網共にギリより小型の銘柄が主体であった。</p>	<p>代表港におけるまき網の漁獲量は23トンで、前年比2,174%、平年比1,816%であった。</p>
佐賀	<p>沿岸漁具による漁獲量は214.6トンで前年並みであったが、平年を下回った。そのうち主要定置網によるものは67.2トンで前年を上回ったものの平年並みであった。</p>	<p>沿岸漁具による漁獲量は3.1トンで平年、前年を大きく下回った。そのうち主要定置網によるものは0.6トンと前年同様極めて低調であった。</p>	
長崎	<p>前年、平年並みであった。(前年比114%、平年比107%)</p>	<p>地域により差があるが、概ね前年を上回り、平年並みであった。(前年比126%、平年比99%)</p>	
熊本 牛深港	<p>水揚量は231.8トンで、平年比61.8%、前年比85.9%であった。</p>	<p>水揚量は372.7トンで、平年比174.1%、前年比535.5%であった。</p>	
鹿児島	<p>4~6月は、豆・小アジ(2003年級群)主体に、6月はアジ仔(2004年級群)も漁獲された。7~9月は、アジ仔(2004年級群)主体に、9月は中・小アジ(1・2歳魚)も漁獲された。4~9月の期間中、1,843トンの水揚げで、前年比104%、平年比75%であった。 (定置網:内之浦) 569トン、前年比167%、平年比106%</p>		<p>4~6月は中・大(2歳以上)、7月は中・大(2歳以上)及び豆(2004年級群)、8~9月は豆・小(2004年級群)主体に推移した。4~9月の期間中、3,276トンの水揚げで、前年比49%、平年比73%であった。</p>

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	<p>中型まき網(6ヵ統分)で29トンの水揚げがあった。これは前年比(8ヵ統)1,072%、平年比(8ヵ統)932%で前年・平年ともに大幅に上回ったが、昨 years が3トン弱と少なかったことを受けての数字である。江崎地区の小型まき網・すくい網では水揚げはなかった。湊地区では9月中心に棒受網でヒラゴが18トン水揚げされたが、他の銘柄は水揚げされなかった。水揚量は、前年比290%、平年比48%と前年を上回り、平年を下回った。</p>	<p>江崎地区の小型まき網・すくい網では本来最盛期の8月にわずか5トン、期間全体でも6トンの水揚量しかなく、8月一杯で操業中止となった。水揚量は前年比47%、平年比21%と前年・平年を大幅に下回った。湊地区の棒受網では8月は中小羽、9月は中羽中心の漁獲で、501トン(大羽42%、中小羽58%)水揚げされた。水揚量は、前年比64%、平年比72%と前年・平年を下回った。9月初旬、台風により操業できなかったことに加え、沿岸に漁場が形成されなかったが、9月半ばから見島沖の千里ヶ瀬付近で断続的に漁場が形成されていた。</p>	<p>江崎地区の小型まき網・すくい網で、6~7月に中小羽中心の水揚げがあり、大羽・中小羽(6%:94%)が277トン水揚げされ、前年比192%、平年比89%であった。湊地区の棒受網では、中小羽・カエリ・シラス(32%:67%:1%)が1,204トン水揚げされた。ここでは6月から豊漁傾向が続いたため、7月から漁獲量制限(全船で1,500箱/日程度を割当)があった。しかし8月後半にカエリの腹部が赤くなり、イリコ加工用に不適との判断から、水揚げを中止した。その結果、水揚量は前年比76%、平年比90%と前年を下回り平年並み。</p>
福岡	<p>代表港におけるまき網の漁獲量は、57トンで平年比440%、前年比1,459%であった。</p>	<p>代表港まき網の漁獲量は288トン。前年比727%、平年比764%の漁獲であった。同じく棒受網の漁獲量は、3.7トンで前年比22%、平年比21%であった。</p>	<p>まき網は、まとまった魚群が見られず、出漁を見合わせた。同じく棒受網の漁獲量は、19トンで前年比74%、平年比27%と不漁であった。</p>
佐賀	<p>沿岸漁具による漁獲量は0.3トンで、前年・平年を大きく下回った。主要定置網による漁獲はなかった。</p>	<p>沿岸漁具による漁獲量は9.5トンで前年・平年を下回った。そのうち主要定置網によるものは1.8トンで前年同様、平年を上回った。</p>	<p>沿岸漁具による漁獲量は160.3トンで、前年・平年を下回った。そのうち主要定置網は11.8トンで、沿岸漁具同様、前年・平年を下回った。</p>
長崎	<p>低調だった前年を大きく上回った(前年比1,854%、平年比137%)。</p>	<p>前年を上回り、平年並みであった。(前年比238%、平年比120%)</p>	<p>地域により、差があるが、概ね前年・平年並みであった。(前年比118%、平年比84%)</p>
熊本 牛深港	<p>水揚量は7.5トンで、平年比83.0%、前年比38.1%であった。</p>	<p>水揚量は757.9トンで、平年比208.7%、前年比245.7%であった。</p>	<p>水揚量は670.0トンで、平年比51.7%、前年比36.2%であった。</p>
鹿児島	<p>まとまった漁獲はなかった。0.3トンの水揚げで、前年比4%、平年比0.4%。</p>	<p>中羽ウルメ(2004年級群)主体にまき網では335トンの水揚げで、前年比94%、平年比36%。棒受網では748トンの水揚げで、前年比90%、平年比129%。</p>	<p>5月以降2004年級群を主体に、まき網では254トンの水揚げで、前年比57%、平年比51%。棒受網では425トンの水揚げで、前年比66%、平年比104%。 (シラス)北西薩海域では、2,135トンで前年比340%、平年比113%。志布志海域では668トンで前年比112%、平年比154%。</p>

注:「前年」は2003年4~8月、「平年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量(沿岸漁況の指標の一つ;棒グラフ)と大中型まき網の1日当たり漁獲量(沖合漁況の指標の一つ;折れ線グラフ、CPUE)。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは福岡県～熊本県(ゴマサバを含むが主にマサバ)、ゴマサバは鹿児島県(マサバを含むが主にゴマサバ)、その他は福岡県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。今後の見通しで言う「並み」は、指標値の増減20%程度の範囲内を想定している。